

# 2023年度 関ヶ原町不破関跡発掘調査現地説明会資料

2023.08.27 名古屋大学人文学研究科考古学研究室

教授 梶原 義実

## 1. 調査要項

所在地 岐阜県不破郡関ヶ原町松尾地内

調査原因 学術調査

文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B）） 2022年度～2026年度

「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」（22H00712）

調査面積 32 m<sup>2</sup>

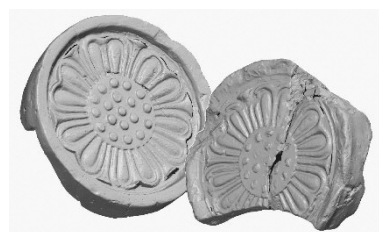
調査期間 2023年8月17日～9月1日（予定）

調査機関 名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室

調査協力 関ヶ原町（担当：地域振興課）

岐阜県（担当：県民文化局文化伝承課）

株式会社イビソク



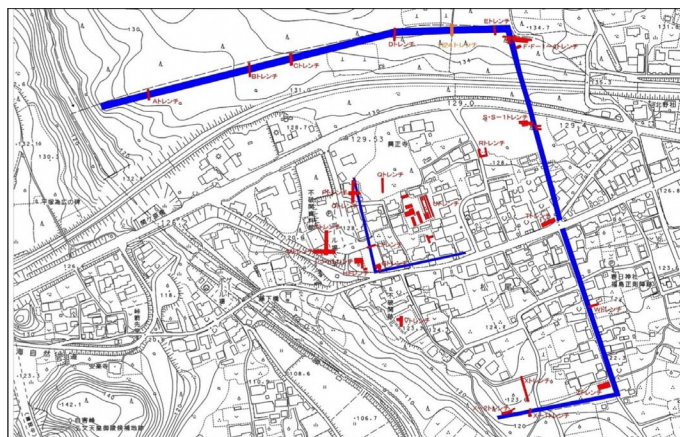
## 2. 遺跡の概要と調査の目的

不破関は672年の壬申の乱後に東山道に設置された関所であり、伊勢（三重県）の鈴鹿関、越前（福井県）の愛発関とともに、三関（さんげん）と称された。

岐阜県教育委員会・不破関跡調査委員会により、昭和48年（1973）から5年間にわたり発掘調査が実施され、西は藤古川の段丘面で画され、北（460.5m）、東（432.1m）、南（120m）の三方を外郭土塁に囲まれる範囲が不破関の範囲であると想定された。推定東山道に面して築地塀の内郭が設けられており、その中に掘立柱建物の政庁が存在する構造が復元された。また外郭の主要拠点には監視用の平面六角形の望楼が設けられたとされる（岐阜県教育委員会・不破関跡調査委員会 1978『美濃不破関』）。

本研究においては、不破関の全体構造を復元することで、関の機能や具体的な政務のあり方についてあきらかにすることを目的としており、本年度は内郭築地南西隅の発掘調査を実施した。

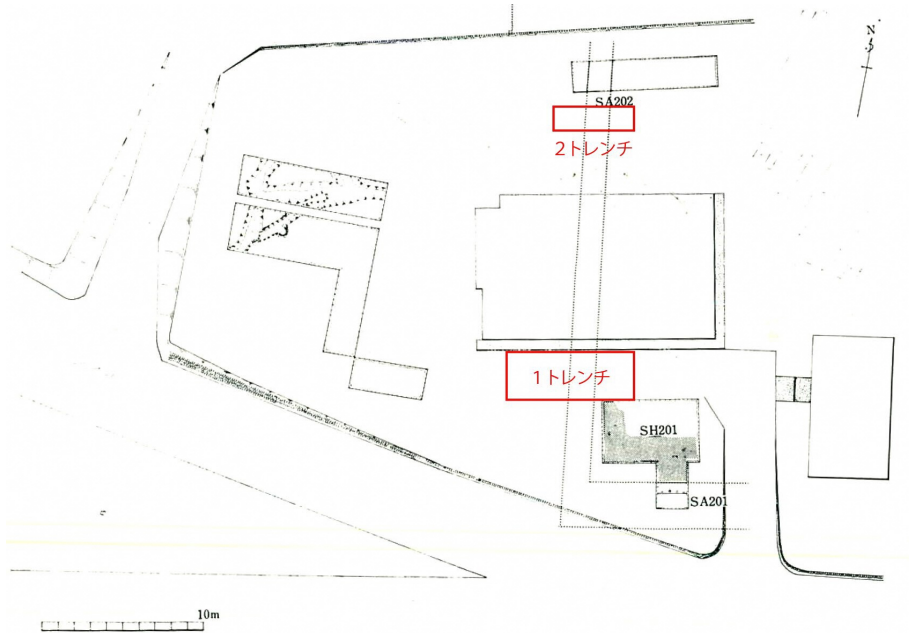
この地点は過去にも発掘調査が実施されており（第2次調査Gトレンチ・Lトレンチなど）、築地基礎部や雨落敷とされる礫敷などが確認されている。今回の調査では、築地遺構の再確認を目的とし、とくにその正確な構造・方位・年代をあきらかにするために実施した。



第1図 不破関トレンチ配置図（富田 2017「不破関の再検討」）

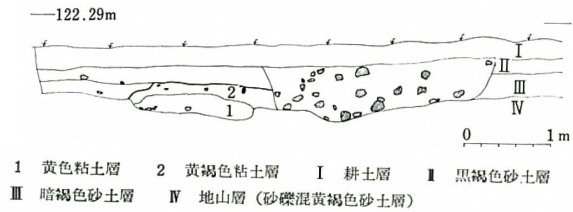
### 3. 2023 年度発掘調査の成果概要

第2次調査 G トレンチの北西に接する形で東西8m×南北3mの1トレンチを、Lトレンチの南側に東西5m×南北 1.5m の2トレンチを設定し、西面築地基底部の規模と構造復元を目指した。



第2図 過去の調査区と2023年度調査区(1:500 『美濃不破関』より加筆引用)

2トレンチでは礫混黄褐色砂質土の地山層を切る形で残存深 50 cm程度の掘込地業が設けられており、その中に下層は礫混黒褐色粘質土、上層は黄褐色粘質土と黒色土が細かく互層状を呈する堆積が確認でき、過去調査所見にも一致することから、これが西面築地の基底部であると判断した。また基底部の東には南北溝が検出され、築地側溝と判断した。側溝は掘込地業の肩に一部重なって掘られており、築地造成後に側溝の掘削をおこなったものと思われる。



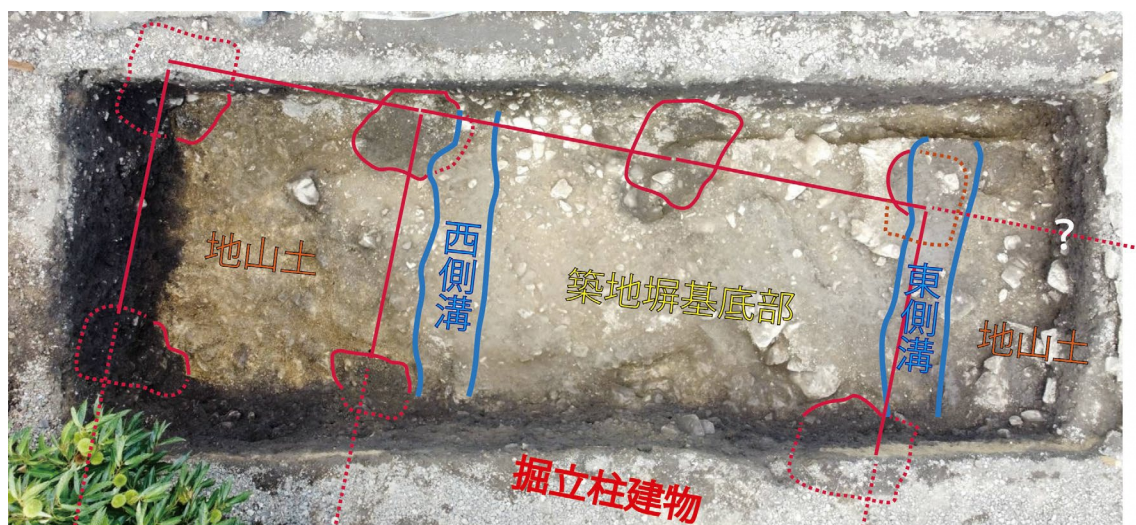
第3図 2トレンチ遺構配置図(右上はLトレンチ土層図)

1 トレンチでは築地の基底部は掘込地業を含めすでにほぼ削平されていたが、2条の平行する断続的な南北溝が確認でき、築地側溝と判断した。溝の残存深は10~20 cm程度とわずかである。この2条の溝の間では部分的にわずかに黄色粘質土の硬化面が確認できることから、この部分に2トレンチから南へ続く築地塀が存在したものと思われる。側溝心々間距離は約390 cmである。

築地塀の東側は過去調査では雨落敷とされていたが、多く検出された大小の礫群は、天端が一致せず不整形で、意図的に敷き並べたような様子は見られなかった。また礫の下部からも黒色土が検出されたことや、築地塀脇に築地側溝（雨落溝または排水溝）が確認できていることから、築地廃絶後の流れ込みや整地等によるものと判断した。トレンチ西側の大きな落ちからは染付類が出土しており、近世以降の造作である。

また1トレンチ北端では、隅丸方形に近い垂直に切り込んだ土壌が4基並んで検出され、さらに南端でもそれらと対になる土壌が検出された。この土壌は東西とも築地側溝に切られる形で検出されており、築地に先行する掘立柱建物の柱穴であると判断した。柱穴の大きさは1辺約60 cm程度、柱中心間の距離は東西・南北ともに2.2~2.3m前後である。検出された柱の配置から考えると、1トレンチ中央部の5個の柱穴に囲まれた部分を身舎とし、すくなくとも西側には庇を配した（東側にも庇を配した二面庇か、北側にも配した四面庇の可能性も考えられる）、南北棟の建物が想定できる。

トレンチ南側では黄色硬化面の下層から大礫が斜方向に並んで組まれたような状況で検出された。性格不明であり、今後さらに精査していきたい。



第4図 1トレンチ遺構配置図

#### 4. 出土遺物

遺物は全体的に少なく、2トレンチからは縄叩きを施した平瓦類がわずかに出土した。平瓦は赤褐色系で薄手のものが多く、過去調査で築地付近から出土した平瓦の特徴と一致している。

1トレンチからは須恵器の甕などの小片が数点出土した。1トレンチ上層の黒色系土からは、中世土師器が1点と、近現代の染付類が多数出土した。

## 5. まとめ

本調査では、まずは所期の目的どおり、過去調査で見つかった内郭築地塀西面を検出することができた。築地の構造については、掘込地業をわずかにおこなったうえで築地基底部の積土をおこなっている状況は、過去調査の結果を追認できた。また西面築地から瓦がほとんど出土しないことも過去調査と同様であり、すでに指摘されているように、東山道に面した南面のみが瓦葺であった可能性は高いと思われる。

その一方で、雨落敷で雨垂れを受けていたという見解については、追認する積極的な根拠が確認できず、通例の築地塀と同様、雨落溝や排水溝を掘って水を排出していることがあきらかとなった。また築地の方位も、過去調査からの見解よりもやや正方位に近く、東面土塁の方位と近いこともわかった。

さらに本調査で最大の成果は、築地塀の造営に先立って造られた掘立柱建物の存在が確認できたことである。築地塀の造営年代については種々の見解があるが、初期不破関の構造を考えるにあたって重要な知見を提供できた。

来年度以降、発掘調査地を変えつつさらに調査研究を進めていきたい。



第5図 2023年度調査 遺構配置図

### 【用語解説】

築地塀：塀の上に屋根のついた土塀。

掘込地業：建物の土台を掘り下げておこなう地盤改良。

雨落溝・雨落敷：屋根の軒から落ちる雨を受ける設備。

掘立柱建物：地面に穴を掘って柱を立てた建物。

### 【謝辞】

本調査においては、地権者様および松尾自治区の皆様にたいへんお世話になりました。心より感謝申し上げます。